慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ローベルト・ムージル『愛の完成』における理性と感性： 現実の有意味性へ向けた努力としての「合一」
Sub Title	Die Vernunft und die Sinnlichkeit in Robert Musils ,,Die Vollendung der Liebe" : die Vereinigung als Bemühungen von einer Relativiät des Gleichnisses zu Sinnmachung für Wirklichkeit
Author	吉野, 泰斗(Yoshino, Taito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.107, (2014. 12) ,p.200 (93)- 220 (73)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01070001-0200

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ローベルト・ムージル『愛の完成』における理性と感性

現実の有意味性へ向けた努力としての「合一」

吉野　泰斗

0. 序論

ローベルト・ムージルの『愛の完成』は1911年、『静かなヴェロニカの誘惑』との連作『合一』として発表された短編小説である。二作の小説にはともに夫に対する不実もしくは相手男性からの隔たりが、愛する者との「合一（Vereinigung）」を成就させるという逆説的な体験が描かれている。この合一という概念に触れる前に、本論が扱う『愛の完成』の筋を予め述べておくと、寄宿舎に住む娘を訪ねるため夫と離れて旅行に出る主人公クラウディネが、その旅中で自身の生活とは関わりのない他者たちと接するなかで、夫との現在の幸福な生活という事実がただ偶然によって成り立っているだけでしかないという意識に襲われる。そして夫との関係への疑念から、彼女は夫への愛と葛藤しながらも汽車で偶然に乗り合わせただけの第三者である参事官の誘惑に乗り、旅先で情事を犯す間際まで進んでしまう。そこで何より奇妙なのは、彼女がこの不実への歩みを夫との愛のための必要事だと感じている点である。本論では、この特異な合一の背後に、処女作の『寄宿生テルレスの混乱』から後年の『特性のない男』にまでムージルの詩作に通底する現実に対する鋭い認識批判が潜んでいると見る。

これまでの研究において、「合一」に関しては、それがどんな種類の対立であるにせよ、「反対の一致」[1]として捉えられてきた。ゲアハルト・バウマンはそれを「『合一』において、どの要素にもいかに多くの対立が互いに

重なり合い、互いに反発し合いながら緊張状態にあるか、〔…〕現在的な想起と想起的な現在がいかに交換可能であるか、いかに親近なものが異他的になり、異他的なものが親近さへと移るか、〔…〕あの状態はそれを明らかにする」[2]と表現する。「あの状態」とはまさに合一を体験している状態であるが、これは後に『特性のない男』で語られる「別の状態（der andere Zustand）」としばしば同一視される。[3]

ハンス・ルドルフ・シェーラーによると、この「別の状態」において「自我は、疑似的な神秘的陶酔のなかで溶解させられたようであり、そして世界との圧倒的な一体感が生じる。パースペクティブ、個体性は克服されたようである」[4]。つまり「内面と外界の境界解放と無境界性の驚くべき感情」[5]が「合一」の状態として指摘されている。しかし「合理的な説明だけでなく、事象に忠実な記述すらも、この『別の状態』に関しては不可能であるように思われる」[6]。というのも、そもそも説明、記述を与える「一般に通用している言葉の本質的な機能は、文字通りの意味で定義なのであり、つまり、名指されたものを他のものから境界づけることである」[7]から。したがってムージルにおいて一義的に対象を名指し、対象として定立する言語は合一を妨げるものとして登場すると見られるのである。

そしてハンス＝ゲオルク・ポットは言語的な秩序、論理的な思考の拒否が合一を可能にすると考え、「自己意識の対立する諸要素を結びつけるのは、思考の物象性を必要としない感情である」[8]と見ている。あるいはモニカ・シュミッツ＝エマンスは、一義的に分節する言語に代わる「別の言語」すなわち「区別の原理をかいくぐり、分ける代わりに結びつける、差異に代わって同一性を強調する」[9]比喩によって合一が目指されるとする。言語の比喩性、比喩による合一という観点については一章にて後述する。

しかし、そもそも言語を懐疑する契機がどこにあるのかが探られねばならない。本論では、言語的な概念が現実を知覚するために欠かせない役割を果たしているにもかかわらず、概念と現実のあいだにはずれがあることにその契機を求める。その際、概念と、概念がそこから形成されるはずである個々に特殊な体験との関係が考察される。そして、上述した比喩によ

る合一を確認し、その問題点を指摘する。また概念と体験の問題が思考と感情の問題に続いていることを明らかにし、クラウディネの「試み」としての「決断」という観点に注目することで、『愛の完成』の合一に偶然性を乗り越えようとするクラウディネの努力を見出すことが本論の課題となる。

1. 言語への懐疑

『愛の完成』における言語の問題を考察するにあたってまず注目したいのは、作品冒頭で夫婦の会話がやりとりされる空間の性質である。

> 「〔…〕部屋のなかではお茶が今、くすんだ銀のポットからカップへと落ち、静かな音を立てて跳ね返り、光のなかで停止しているようだった。まるで麦わら色の軽いトパーズでできた、ねじれた透明な柱のように。〔…〕妻の腕は、ポットから突き出て、夫のほうを見るその目は夫と、硬直してぎこちない角度をなした。／確かに、見ることができるような角度を。しかしあの別の、ほとんど物質的なものをこの二人だけが、その角度のなかに感じることができた。それは彼らには、あたかもその角度がごく固い金属の筋交いのように彼らのあいだに張られ、彼らをその場にしっかりととどめ、彼らが互いにこのように離れていたにもかかわらず、それでも彼らをしかと感覚でもって感じることができるある統一へと結びつけているかのように思われた」[10]

この場面がとりわけ注目に値するのは、ごく平穏な、むしろ安定しきっているとも言えるこの冒頭において、「統一へと結びつけて」ともあるように、一見すでに夫婦の間に合一が成り立っているかに見えるからである。また、クラウディネと夫の一体化のイメージは「その内部が一層大きく互いの内に溢れ出す一方で、互いに組み合わさって外側に向けては境界を縮小させていく、ふたつの見事に互いに一致し合う半分」[11]とも表現されているが、これは、その境界の縮小と内部の増量という関係から球体として表象される。さらに、夫婦のこの空間を表現するものとしては「突然に表面

が整い、結晶（Kristall）が形作られるときのように」[12]というものも見られる。これらの形象の配置によって、冒頭の引用において際立ってくるのは、角度や線といった幾何学的要素であり、硬直や静止といった動きのない空間構成である。幾何学とは秩序をまさに象徴するものであり、線と線が幅のない一点で厳密に交わるその秩序においては、一義的なものだけが許容され、ずれやぶれは徹底的に排除される。ある図形をなす線上にある点以外のどんな点についても、その図形がなす領域の内部に属するのか外部に属するのかが必ず一義的に決定される。それは論理学における排中律（AはBかつ非Bであることはできない）の法則にあたる。したがって、『愛の完成』の冒頭場面は観念的と言ってもよいほどの不動の幾何学性をもっていると特徴づけることができる。

ポットは、この幾何学的な空間が夫婦の「ノエシスの作用」[13]によって形作られていると性格づけている。ノエシスとはフッサール現象学の用語で、対象と相関的な意識による、対象への意味付与作用のことだが、フッサールによると、感性的な知覚体験はどれも命題の形に直すことができる。[14]というのも知覚の層も、言語とは異なる程度においてであれ、言語が持っている差異の弁別的な連関という性質を持たなければ、どんな知覚対象も区別されえないからである。[15]したがって、知覚において主体は自身が所有している言語という秩序によって現実を分節していることになる。ポットも「このインテリアの描写は純粋な内面性の、意識の内在の描写である」[16]として、この幾何学的な空間構成が夫婦の内在の投影であることを論じている。つまり、「言語は秩序の範型を網のように事物の上に置き、それでもって名付けられたものを捕える。観察者はその捕らえられた現実を、それからはつねにあの言語の織物という座標系のうちで見るのである」[17]。ムージルも「予め形成された安定した表象なしでは、そしてそれが概念なのだが、本来、混沌しか残らない」[18]と述べるように、主体は言語的な差異の連関によって対象を統握するということを確認している。

しかし、人間の知覚は既知の言語的な秩序によって現実を整然と分節しきれているだろうか。『愛の完成』では夫と離れ旅行に出かけて以後、クラ

ウディネの知覚する風景や事物はもつれ、幾何学性はほころびを見せるのだが、夫との会話のなかで第三者を話題にした後にすでに彼女はこの幾何学的な秩序の脆さに不安を覚えている。

> 「あなたはこの感じを知っているかしら。ときどきあらゆる物が、突然、二度そこにあるのを。人がそれらを知っているように、全き姿ではっきりと。それからもう一度、あたかも別の者がそれらを密かに、そしてもうよそよそしく見つめているかのように、色あせて、薄暗く、驚いた様子で」[19]

ここでは事物の既知の相貌と「よそよそしい」相貌の二重化、多義性が語られている。ムージルはたしかに知覚における概念の役割を不可欠なものとする一方で「他方で概念も経験に依存している」[20]とも言う。無批判に観念の生得的な所有を主張しない限り、概念化される以前の、あるいは概念によって把握される「根源的な体験」[21]が要請されるのは当然である。だが、先述の通り、知覚には概念的なものが不可欠なのであり、概念的なものを通さずに「根源的な体験」をそのまま捉えることはできず、しかもその際、他の既知のものとの照応において捉えられるため、個々の特殊であるはずのものは、何かに似たあるものに変造されることになる。

また、ムージルにおいて概念的なものはしばしば、非概念的なものに投げかけられる「網」に喩えられるが、問題はその「網」の形成過程、存在根拠が必然的でないことである。「ひとつの網目が他の網目を支えていて、それで全体が自然なほど素晴らしく見える。でもそのすべてがそれによって繋がれている最初の網目がどこに潜んでいるのか誰も知らない」のであり、「何らかのきっかけでこの諸関係が機能しなくなり、内的な秩序の系列のどれも訴えかけることをしなくなるときには、ただちに人は再び、記述できない、非人間的な、そう、撤回された無形の創造の前に」[23]立たされるという。

シュミッツ＝エマンスはムージルの言語観に、とりわけ概念を「そのつ

ど特殊な現実の縮減過程」[24]として見る点に、ニーチェの影響を読み取っている。たしかにムージルは複雑で感覚的な印象が明確な概念へと合理化されるプロセスを、ゲシュタルト的な定式形成によって説明しており、それを「簡略化」[25]とも言っている。「言語に仲介されたものとして、事物はいつもすでに変造されて現れる。そして言語によって条件づけられた変造はニーチェにとって、とりわけ特殊なものの普遍化に起因している」[26]。人間の知覚は本来、身体の運動と対象の協働によって成り立つものである限り、知覚されるものは稠密性をもった直線といったものや幅のない点という概念による定義がなされた命題から成る幾何学的なものなのではなく、ぶれやずれを許容する、むしろそのぶれやずれが知覚を可能ならしめるものである。[27]だが、知覚主体にとってまず与えられるのは合理化された対象であり、ぶれはいつも何かのぶれとしてしか捉えることができないのである。それが何かのぶれでなければ、ムージルも言う通り混沌でしかないのであり、結局、気づかれえないことになってしまう。そして、それが合理化であれ、簡略化であれ、何かのである限り、一連の流れとしてしか表象されえないのである。それゆえ、個々の印象はあるひとつの個物として、またそれぞれの個物はあるひとつの概念によって捉えられざるをえない。したがって、「根源的な体験」である特殊なものに依存する概念の形成過程には「等しからざるものを等置する」[28]という置き換えが生じている。あるものを別のもので置き換えることを広い意味でメタファーないしは比喩と呼ぶならば、言語によって何かを捉えたと思い込むとき、実際は比喩しか所有していないことになる。

『特性のない男』では、概念は硬直した比喩にほかならないとされている。[29]対象の意味は本来、原理的に主体と相関的であるため、ぶれや経験連関によってそのつど変化するということが、対象の即自存在という臆見によって忘却されるとき、対象は一義的で固定的な意味をもつものとみなされる。しかも、言語と体験は相互依存関係にあるため、同じことが言語にも当てはまる。つまり本来、そのつどの文脈によって意味を変えるはずの語すなわち概念が、それ自身固定的な意味をもっているものとされるので

ある。これによって言語と現実の一致ということが素朴に自明視されてしまうのである。『愛の完成』のなかでは言葉による秩序づけから漏れたものは、「わめくもの」[30]や「ざわめき」[31]などと際立ちをもつに至らない不可解なものとして、もしくはより直接的に「言いえないもの」[32]と表現される。

さらに、それぞれ個体性をもった特殊なものと言語の通分不可能性から結果する「変造」は事物知覚においてのみならず、心的領域や社会的領域についてもあてはまる。言語の比喩性に気づかない人間にとって、自己に関する言語的な規定は自己を個性化する特性であり、自己規定の概念的な言葉が隙間なく繋がっていくことで自我の連続性が保たれる。それゆえその人間が言語的な規定のない沈黙に直面するなら、自己の個性が失われて他者と交換可能な偶然的存在になってしまう。次の叙述は、クラウディネが以前、散歩の際に世間の暮らしを見たときの印象であるが、馴染みあるものだけに取り巻かれている生活という点で、彼らの状況は冒頭での夫婦の空間構成と場面と重なっている。

> 「そのなかのいたる所に、狭い空間のうちでの自身の反響による引き止めがあった。その狭い空間は、とても耐えられないものを聞かないようにするため、どの言葉も受けとめ、次の言葉まで引き伸ばす。とても耐えられないものとは、あいだに空いた間であり、二つの行為の縁のあいだの深淵である。人は自我感からその間へと沈み去る。どこか二つの言葉のあいだの沈黙へと。その沈黙は、自分のそれであるのと同じくらい、まったく別の人間の言葉と言葉のあいだの沈黙であってもおかしくないのだ」[33]

しかし、言語の比喩性を暴露した人間にとっては、言語がそもそも特殊なものの普遍化であるからには、言語的規定は一般的な概念であり、他者と交換可能な非個性的なものである。さらに言語の形成過程に「根源的な体験」との必然的な関係が見出せない限りで、言語は偶然的なものである。それゆえクラウディネは、「沈黙」の方に自己の真の個性を保証する究極の自

我感を求めているようである。「彼女は再び、自身について言えること、言葉で説明できることが問題なのではなく、すべての正当化はあるまったく別のもののうちにあるのだと感じた。ひとつの微笑みに、黙りこみに、内的な自己の聞き取りに」[34]。したがってここには、言語において個性的だったものが沈黙において無個性になり、沈黙における個性的なものが言語において無個性であるという反転が生じている。[35]

言語の比喩性が暴かれない限り、言語はそれによって規定されるものに個性を与える、すなわち個体化の機能をもつ。個体化とは文字通り、あるものを他から区別することであり、A を A でないものから区別することである。そこでシュミッツ＝エマンスはユルゲン・シュレーダー以来指摘されてきた「言語の極限値」[36]という比喩の性格に注目する。たとえば、「まるで A のように」という比喩の形において、A と非 A が同時に成り立つ、すなわち排中律が無効になっている。この場合、A はたしかに A ではないのだが、もはや非 A だとも言えないほどに A に接近している。つまり「あれか、これか（entweder-oder）」ではなく、A でもあり非 A でもあるという「…でもあり、…でもある（sowohl-als-auch）」の形をとるのである。ついでに言えば、あらゆる特性を拒否するとは、A でもなく非 A でもないという「…でもなく、…でもない（weder-noch）」ことであるが、これはすなわち非 A であり A であることになり「…でもあり、…でもある」という言明と同じである。

しかし、すでに述べたことだが、実はこのような明確に比喩の形をとる場合以外にも、言語はつねに比喩の性質をもっている。というのも語は即自的に一義的な意味を担っているのではなく、本来、文脈によって意味を変える多義的なものだからである。ムージルの比喩の多用は、作品全体を通して際立っている。冒頭の幾何学の場面においてもすでに、「ように（wie）」、「かと思われた（scheinen）」、「ほとんど（beinahe）」、「あたかも張られ、留め置き、結びつけているかのように（als spannte〔…〕und hielte〔…〕und vebände）」などの比喩の性質をもつ表現が繰り返されていた。一義的で幾何学的な空間構成というその内容とは裏腹に、その空間の仮象性

を言い立てるかのように比喩が多用されている。ここでは外界と内面の、世界と主体の即自性と対自性がせめぎ合っているのである。

2. 理性と感性あるいは思考と感情

クラウディネの個性が位置すると思われる沈黙は、「悟性によってはほとんどもはや捉えられない感情」[37]とも言われる。前章でみた言語と沈黙の対比は、思考と感情、理性・悟性と感性の対比でもある。

ところで言語の偶然性は、言語が本質的に比喩であり、比喩の連鎖の根が明らかでないということにあった。しかし、「根源的な体験」から概念への移行にたとえ普遍化という過程が伴うとしても、その移行に何らかの理性的な根拠があれば言語と現実のあいだに必然的な繋がりが確保されるのではないだろうか。比喩における合一という考え方は、言語の偶然的な側面にしか注目していないように思われる。比喩における合一は文脈によって言語が規定するものの意味が変りうることによっていたが、そのことによっていかなる意味も等しく相対化されるならば、合一は結局混沌としてしか達成されないことになる。だがまた、個々の特殊なものから全体の文脈が形成される要因を見極めるのは容易ではない。というのも、今述べたように「文脈」は意味を規定するものであるが、主体の意識が所有している言語的な差異連関の側と、ぶれや現出などの自然あるいは感性の側と、二つが考えられ、どちらが先行するのかという問いが立てられるからである。そして実はこの議論と同じジレンマが、ムージルと同時代の「ゲシュタルト」をめぐる論争のなかにも現れている。つまり、「ゲシュタルト」という全体が感性によって捉えられるレアールなものであるのか、知的作用によって産出されたものであるのかという議論である。

マイノンクをはじめとするグラーツ学派は、この全体の知覚には感覚以上の知的作用が加わっているとみなしたが、意味を与える全体が意識によって産出されたものであるとすれば、現実は意識の内部において構成された、独我論的な単なる表象と化してしまう。それに対して、ケーラー、コフカ、ヴェルトハイマーらのベルリン学派は、ゲシュタルトは知的作用を

介さず直接に与えられるとした。しかし彼らは、それが知的産出によらないことから、ゲシュタルトをレアールに存在するものとして考えてしまった。つまり、要素的な刺激を全体的な刺激にすげ替え、しかも外的に実在するゲシュタルトに対応するゲシュタルトが大脳の生理学的過程にも実在するという、心理物理同型説を主張したのである。[38]

もし意味という現象がそのままレアールなものに還元されてしまうとしたら、人間の思考は物理的な生理学的過程によって因果論的に規定されることになる。この場合、人間は理性的な自由意志の主体であるという想定は、実は物質的自然の因果関係によって思い込まされた幻想にすぎなくなり、人間は一義的な因果的決定論に巻き込まれてしまう。ムージルは「心理学的に内面的なものでもって与えられるのは、人間に本質的なものの結果であるが、しかし本質的なものそのものではない」[39]として、人間を徹頭徹尾感性に依存した存在として見る態度に反対する。したがって完全に感性的なものとしての「強力な単なる感情体験は感覚とほとんど同じくらい非個性的である。感情はそれ自身では質に乏しく、それを体験する者がはじめて固有性を持ち込むのだ」[40]。そして人間にとって本質的で個性が可能となる場は「感情と悟性の相互的な巻き込み合い」[41]にあるとする。したがって、単に思考や概念的なものから離反し、感情へ逃避することに合一が求められるとは考えられない。

それでは感情と対置される理性・悟性、思考の方はどうか。現実がつねに既存の言語的な経験連関との照応においてしか与えられないのだとすれば、主体が現在において知覚するものもそれ自身個性的な意味をもったものとしてではなく、つねに自身が既に体験した何かと似たものとしてしか経験されないことになる。それゆえ「根源的な体験」に憧れるクラウディネには「彼女にはすべてが、あたかもすでに一度体験したことのように思われた。彼女の言葉は、彼女がいつか以前に発したはずの言葉の跡にはまり込んでいるようだった」[42]。だが、この問題の射程は現在の知覚だけに限られない。というのも、クラウディネはさらに続けて「彼女は、何をしているかということには気を払わず、今していることが現在であり、それに

似た何かが過去であるという区別に注意を向けていた」[43]という混乱が示すように、現在と過去の相対性という問題も孕んでいるからである。「人がする経験と、経験するのを助ける概念のあいだには、独特の不安定な関係がある。各々の新しい経験はそれまでに獲得された経験の定式を破壊するが、同時に、その新しい経験は既存の経験の定式の意味で経験されるのである」[44]。

この経験連関の絶えざる更新により、自身の過去は、一義的に実在したものとして固定されえなくなり、つねに更新され続ける現在の経験連関からのいつも新たな捉え直しに曝されている偶然的なものであったことが明らかになる。そしてこれにより、直線的な事実の継起と合致していた主体の自己同一性も脅かされることになる。だがさらに、絶えざる更新、捉え直しという問題は、直線的で一義的な時間経過を疑いにかけるだけでなく、主体的な行為可能性への懐疑あるいは決断不能という問題へも通じている。

> 「世界の諸決定のあいだで、自分に決定が定められているのを見つけられず、その諸決定の真っただ中で生の縁に押しやられて、空虚な空間という盲目で巨大なものへ転落する寸前の瞬間を感じるという感情をもって〔…〕」[45]

『愛の完成』には現実の懐疑という認識論的な側面に隠れて目立たないながらも、行為や意志、決断という実践的な主題が見出せる。『特性のない男』の「留保なしには何も肯定できない」[46]「準備の囚人」[47]であるウルリヒも決断不能ということに関してはクラウディネと同様であるが、彼が採り上げる行為と捉え直しの関係は問題の所在を明らかにするのに役立つだろう。

> 「ぼくは、誤った一歩が問題になるのではなくて、それに続く次の一歩が問題になると言ったんだ。だが、その次の一歩のあとには何が問題

になるだろう？　それでも明らかにそれに続く一歩なのか？　そして第n番目の歩みのあとにはn+1番目の歩みが問題になるのか!?　そのような人は終わりも決定もなく、それどころかまさに現実なしで生きているに違いない」[48]

いかなる行為の意味も、つねに次の新たな行為の文脈において捉え直されざるをえないなら、最終決定的なものではありえない。このことは、理性は今作動中の自己については反省できないことに起因している。つまり、対象化的な意識が自己を反省しようとするとき、その反省しつつある作動中の反省作用自体を反省することはできず、さらなる反省のためのそれに続く反省作用が要請されるという、反省の無限後退である。クラウディネはしばしば、自身が現在、何を考えているのかわからない状態に陥っている。[49]理性的な行為とは目的（対象）のために意図（Intention）した行為をなすことであると考えられるが、行為を完全な意図のもとに行うことは可能であろうか。ある目的のために計画（意図）を立てる場合、その目的に完全な意図によって到達するためには、理性は自己の現在について対象化できない限りで、その計画を立てる計画を先に立てなければならない。つまり計画の計画が要請され、無限小分割的に計画が連鎖してしまう。したがって、この目的志向的な、対象化的な意識による行為の完全な支配は原理的に不可能であり、行為には決断を無造作に下す、目的志向的な意識にとっては深淵を跨ぎ越す瞬間が必要なのである。厳密に言えば、自身の意識の知らない瞬間に決断がなされていることになる。

しかし、このような意識の盲点、理性が制御しきれない感性的な側面は、理性にとって欠陥なのであろうか。現在の意識についての反省不可能性がある限り、計画のためのすべての前提を見通すことはできないため、完全に合理的な計画を立てることは人間にとって不可能であるが、現在の意識についての反省不可能性を人間の理性的能力の不足と考えるならば、完全な理性を所有する神のような存在にとってはすべての前提を見通すことができることになる。それゆえ神には、完全な理性の統御のもとで目的のた

めに意図された行為が遂行可能なはずである。しかし、目的のために意図された行為を完全な理性の統御のもと遂行することが可能だとする想定、すなわち完全に合理的な計画を立てることが可能だとする想定は、諸事象が計算可能であることを前提としている。これはAでなければ非Aであることが必ず一義的に決まるとする排中律を必要としている。だがそうであれば、人間の行為を含め、現実に起こる出来事を述べる命題はすべて、それが生起する以前からつねに真であったことになり、そのときまさに、完全に理性的な行為が可能であるためには論理的決定論に陥らなければならないという逆説が生じる。前提から自動的に結果が導出される論理学において、主体の意志は介入する余地がなく、機械的に一義的な経過を辿るだけである。したがって、無限の反省能力をもち、最高の理性の体現者であるはずの神はそのときまさにまったく選択の余地がなく不自由であり、意志を所有できない。そして完全な理性的存在は、決定論、意志の所有の不可能という点で、物質的自然の因果関係に一義的に規定される感性的存在と重なることになる。

以上により、文脈によって意味が変化することに基づく比喩による合一が、その相対性を越えていくためには、文脈がレアールなものから一方的に与えられるのでもなく、主体が恣意的に産出するのでもない仕方で、作られる必要があることが示された。また、感性に身を任せても、完全な理性を希求しても決定論に陥り、クラウディネの偶然の意識は消えないと考えられる。また理性の不完全性によって、完全に意図することはできない決断の連続で進行してきた夫との関係をクラウディネは偶然的だと感じ、夫との愛を必然へと高める合一へと促されるのである。

3. 相対性を越えて

前章で指摘したとおり、行為の偶然性からクラウディネは夫と離れてからというもの、たしかに「自分の意志の、このぼんやりした放棄」[50]を感じたのだが、その際見過ごせないのは、クラウディネがその偶然性にまったく身を任せることだけにとどまっていない点である。というのも「その背

後には、しかし彼女の愛の試みがあった」[51]からである。たしかに何も最終決定的なものはありえず、自身の行為を十分な根拠、確信からなすことはできないのだが、それにもかかわらずクラウディネは深淵を跨ごうとしているかのようである。

> 「狭い通り道を行くかのようです。獣も人間も花もすべて変ってしまう。自身もまったく別なように。〔…〕踏み越えなければならないのが、ただの一本の線だとは奇妙なことです。私はあなたに口づけして、それから急いでまた跳び戻って見てみたい。それからまたあなたへと。そしてこの境界の踏み越えのたびに、私はそれをより詳細に感じるに違いありません」[52]

これまでの考察によって、理性を感性に還元することも、またその逆も背理となることは明らかである。それゆえ理性と感性の相互の絡み合いを探らなくてはならない。フッサールは『イデーン II』において、事物から実践的な意味を排除する自然科学的な世界の見方である自然主義的態度と対照させた、事物を実践的な意味によって捉える人格主義的態度における自我、すなわち人格的自我の考察を行っている。人格主義的態度における世界、すなわち精神的世界の法則は「動機づけ（Motivation）」[53]であるが、それは、自然主義的態度における法則である原因―結果の因果関係とは異なり、理由―帰結（Weil － So）の関係である。[54]因果関係が、心理物理的な存在としての人間を含めた物理的な事物の「実在的な関係」であるのに対し、動機づけは、人格と環境世界内の事物との間の「志向的な関係」すなわち意味による関係であるとされる。[55]フッサールによると因果関係や感覚与件なるものは自然が構成されて初めて認められるのであるから、そもそも自然物とみなされる自己同一的なものをそれとして「意味」づける、より根本的な生の働き、「意味」の現象があるのである。[56]したがって意味による関係から成り立っている精神的世界の自然主義的な世界に対する優位が主張される。しかし、ここで注意すべきは、フッサールが「どの精神も

『自然の側面』をもつ」[57]と述べていることである。この「暗い基盤」[58]とも呼ばれる自然はもはや自然主義的態度において対象として見出される自然ではなく、人格的自我が拠って立つ、衝動や傾向などの自身の感性の層である。それゆえ精神的な世界の見方においても理性と感性が差し当たり区分されるのであるが、両者は一方が他方に完全に依存しているような一方的基づけ関係にあるのではない。理性はたしかに感性に支えられ、理性の能動性が及ばない感性が与えてくるものによってその作用が可能になっているが、感性に完全に縛られることはなく、自由な態度決定をなす。そして、理性による態度決定は習慣として感性の層に沈殿して、感性による物の与えられ方に影響するのである。フッサールは感性にも「隠れた理性」[59]を、自我が意識できない形でそれが働いている限りで、人称的な自我や「私」のではない、いわば自然の理性を見た点で、理性という概念を拡張していると言える。理性が能動的に作用できるのは、何よりも感性の段階ですでにある種の理性が作動し始めているからであるが、理性は感性が与えてくるものを利用する形で能動的に判断を下すのであるから、その判断は感性がもっている習慣化した経験連関を捉え直す働きでもある。感性はたしかに理性を下支えしているものの、理性による捉え直しによって初めてその存在が確認されるのである。それゆえ、理性は感性に支えられているが、感性は理性に包摂されて初めて存在資格を得るという、両者は独特の基づけ関係にあるのである。こうして、人格は、感性に条件づけられているため、与えられてくる対象をそのつど自由に産出できるわけではないが、感性が与えてくる対象をただ受け取るだけでもない。その対象は以前の主体的な判断や行為が習慣として沈殿した感性によって与えられるものでもあるため、主体的な判断や行為は自身の習慣を捉え直す＝更新していくことも意味している。そして、以後の対象の与えられ方に影響していくのだから、主体的な判断や行為は偶然的・事実的状況を必然的状況へ変えていく運動でもあると言える。

したがってクラウディネの決断への憧れは、単に偶然に身を任せることであるわけではなく、その偶然性を自覚しつつそれを引き受けて、試みと

して決断する意志である。クラウディネは旅先で出会った第三者と不実をおかすという自身の決定を、最終決定的なものではない試みとして、あるいは「嘘」[60]、「偽りの告白」[61]として下すのである。この留保・未決定という様態における決断の「試み」という性格は、後に「エッセイスムス」[62]として展開されるものである。「書きつつある『エッセイスト』はつねに新たな端緒において働いており、誰もその端緒について決定的な妥当性の要求を掲げることはしない。やむをえず固定するが、エッセイストはその固定を『スナップショット』として解するのである」[63]。この「スナップショット」はたしかにひとつの決定を下すことであるが、飽くまで一回限りで更新される暫定的なものである。あらゆる決定を一時的なものとして捉える態度はしかしさらに、「自覚した人間のエッセイスムスはおよそ、世界の投げやりな意識状態を一つの意志へと変えるという課題を見出すだろう」[64]として、偶然を必然へと変えていく運動としても考えられている。たしかにそのつどの決定は「スナップショット」として一時的な意味しか持ちえないのだが、その「スナップショット」の暫定的な意味を決定する端緒、すなわち「スナップショット」の意味を規定する文脈をつくる端緒を意識的に変更させることで、これまでの文脈を捉え直し、さらに異なる文脈における「スナップショット」を体系的に集めていくことができる。この収集の過程に完結はなく、対象の意味は最終決定的なものとはなりえないが、対象の意味を漸近線的に厳密にしていくことは可能である。

以上からすでに明らかなことであるが、最終的には偶然的な自然（この場合、対象化されうるような自然物のことではなく）の地盤へと突き当たることから、意味を根拠づける絶対的で不動の、アルキメデスの点のようなものは実在しない。それでも、何かが現実だとみなされうるのは、自然の偶然性に隠れた理性が働いているからであり、それが現実的だと言える理性的な根拠があるからである。そこで、対象を意識の相関者としたフッサールにとって、現実が理性的に根拠づけられるために重要であるのは幻滅（Enttäuschung）の可能性があることであった。理性には統御しきれない感性という、いわば意識の盲点があるため、見間違いや思い違いをする

可能性がつねにつきまとっている。「このように不十全的に与えてくる現出にもとづいた理性定立は『最終決定的』なもの、『克服不可能』なものではありえない」[65]。それゆえ何かが現実的であるための理性的な根拠は、周囲や主体との関係において、その対象の知覚過程の調和的な進行が今までのところ、このような幻滅の可能性がつねに存在するにもかかわらず、破られていないという点に求められるのである。したがって、この幻滅可能性は意識の盲点である感性に起因するのであるが、この盲点こそが現実に理性的な根拠を与える重要な契機になっているのであり、相対のなかにおいても現実的な意味が湧出しうる条件なのである。

クラウディネの「夫と愛し合っている現実」という比喩も、それが十分な根拠によって固定された意味をもつものではないが、単なる相対主義を超えてそれが何らかの意味を持つためには、幻滅可能性があるにもかかわらず成り立っていることが求められる。したがってクラウディネの「試み」は、「夫への愛」を自覚的に異なる文脈に置き入れることであるとも考えられる。そしてその幻滅可能性が大きくなるほど、それにもかかわらず成り立つ愛はその現実性を高めていくことになるが、その手段が不実なのである。そして感性は、その盲点的性格によっていつもさらなる幻滅可能性を用意し、そして獲得された理性的根拠を、新たな次の文脈でさらに確証することへと促すのである。したがって、深淵を跨ぐ仮の決断という「試み」は、相対的で偶然的なものにすぎなかった比喩を、促しと確証という無限のサイクルに乗せて、そこから漸近線的に必然的な意味へと変えていくプロセスとして考えられるのである。

4. 結論

本論は、合一をめぐるクラウディネの現実懐疑を言語と行為の両面から考察した。言語の面では、言語の本質が比喩であることを確認したが、比喩における合一には文脈によって言葉が意味を変えることが重要であった。文脈によって意味を変えるのは事物を規定する言葉だけではなく、行為や出来事にも通じることを確認し、本論では「夫と愛し合っている現実」

も文脈によって意味を変える比喩と見た。そしてその際、クラウディネが能動的にその比喩の文脈を変えることで、また、最も幻滅の可能性が高い不実という文脈に置き入れることで、「夫と愛し合っている現実」という比喩を、最終的な確実性は望めないながらも現実的な意味に高めたことを確認した。しかし、文脈を変更していく過程に終わりはないのであり、不実という道を通って完成を目指すのは辛い道のりである。

註

1 Vgl. Monika Schmitz-Emans: Das Doppelleben der Wörter. Zur Sprachreflexion in Robert Musils „Vereinigungen“ . In: Robert Musil - Dichter, Essayist, Wissenschaftler. In: Musil-Studien Bd.8. Hrsg. von Hans-Georg Pott. Wilhelm Fink, München, 1993. S.70-125, hier S.104.

2 Gerhart Baumann: Robert Musil: Dichter der Vereinigungen. In: Robert Musil. Studien zu seinem Werk. Hrsg. von Karl Dinklage, Elisabeth Albertsen und Karl Corino. Rowohlt, Hamburg, 1970. S.40-56, hier S.47.（本論文中の〔…〕はすべて筆者による省略）

3 Vgl. Hans-Georg Pott: Robert Musil. Wilhelm Fink, München, 1984. S.122.「ウルリヒとアガーテの出会いは、以下では、直接的に一つになる試みによって特色づけられる、つまり（愛の）合一である〔…〕。〔…〕別の状態という指標が、主題的に繰り返し現れる」

4 Hans-Rudolf Schärer: Narzissmus und Utopismus. Eine literaturpsychologische Untersuchung zu Robert Musils Roman „Der Mann ohne Eigenschaften “. In: Musil-Studien Bd.20. Willhelm Fink, München, 1990. S.123.

5 Robert Musil: Der Mann ohne Eigenschaften. In: ders.: Gesammelte Werke Bd.I. Hrsg. von Adolf Frisè, Rowohlt, Hamburg, 1978. S.765.（以下、MoEと略記）

6 Schärer, S.122.

7 Schmitz-Emans, S.102.

8 Hans-Georg Pott: Robert Musil. Wilhelm Fink, München, 1984. S.39.

9 Schmitz-Emans, S.102f.

10 Robert Musil: Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autographisches, Essays und Reden, Kritik. In: ders.: Gesammelte Werke Bd.II. Hrsg. von

Adolf Frisè. Rowohlt, Hamburg, 1978. S.156.（以下、Prosa und Stücke と略記）「／」は原文中での段落変更を表す。

11 Ebd., S.159.

12 Ebd., S.157.

13 Pott, S.28.

14 「どの『思念されたものそのもの』も、任意の作用の（詳しく言えば、ノエマ的『核』としての）ノエマ的意味におけるどの思念も『意義』によって表現可能である」。フッサールは知覚などの直観における意味志向を「意味（Sinn）」と呼び、言語（フッサールの用語では「表現」）の水準における意味志向を「意義（Bedeutung）」と呼び、両者は区別される。Vgl. Edmund Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. In: ders.: Husserliana. Bd.III,1. Hrsg. von Karl Schumann. Martinus Nijhoff, Haag, 1976. S.286.（以下、Ideen I と略記）

15 しかしここで注意しなければならないのは、「〔…〕表現されるもののすべての特殊性が表現に反映されうるわけではない。意義作用の層は下位層の反復ではないし、原理的にそうではない」Vgl. ebd., S.291.

16 Pott, S.28.

17 Schmitz-Emans, S.72.

18 Prosa und Stücke, S.1146.

19 Ebd., S.159.

20 Ebd., S.1146.

21 MoE, S.1089.

22 Prosa und Stücke, S.82.

23 MoE, S.1090.

24 Schmitz-Emans, S.74.

25 Prosa und Stücke, S.1219.

26 Schmitz-Emans, S.70.

27 フッサールは知覚における身体の運動感覚（Kinästhese）の不可欠性を説いている。Vgl. Edmund Husserl: Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie. In: ders.: Husserliana. Bd.VI. Hrsg. von Walter Biemel. Martinus Nijhoff, Haag, 1954. S.109.

28 フリードリヒ・ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽について』（渡辺二郎訳）、ニーチェ全集　第３巻、理想社、1965年、301頁。

29 Vgl. MoE, S.574.

30 Prosa und Stücke, S.166.

31 Ebd., S.184.
32 Ebd., S.173.
33 Ebd., S.187.
34 Ebd., S.183.
35 Vgl. Dietmar Goltschnigg: Die Bedeutung der Formel „Mann ohne Eigenschaften“. In: Vom „Törless“ zum „Mann ohne Eigenschaften“. In: Musil-Studien. Bd.4. Hrsg. von Uwe Baur und Dietmar Goltschnigg, Wilhelm Fink, München, 1973. S.325-347, hier S.325f. ゴルトシュニックは、『特性のない男』にこの反転現象が見られることを指摘している。
36 Vgl. Jürgen Schröder: Am Grenzwert der Sprache zu Robert Musils „Vereinigungen“. In: Robert Musil. In: Wege der Forschung. Bd. 588. Hrsg. von Renate von Heydebrand, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1982. S. 380-411.
37 Prosa und Stücke, S.180.
38 村田純一『知覚と生活世界』東京大学出版、1995年、44頁以下参照。
39 Robert Musil: Tagebücher, Aphorismen Essays und Reden. In: ders.: Gesammelte Werke in Einzelausgaben Bd. II. Hrsg.von Adolf Frisè, Rowohlt, Hamburg, 1955. S.780.（以下、Tagebücher と略記）
40 Prosa und Stücke, S.1000.
41 Tagebücher, S.779.
42 Prosa und Stücke, S.180.
43 Ebd.
44 Prosa und Stücke, S.1151.
45 Ebd., S.167.
46 MoE, S.249.
47 Ebd., S.593.
48 Ebd., S.735.
49 Vgl. Prosa und Stücke, S.174.「そして次第に彼女は、もはや自分がどんな様子なのか感じられなくなり、現在にあって彼女の輪郭は暗闇のなかの奇妙な穴のように思われた」
50 Ebd., S.171.
51 Ebd., S.180.
52 Ebd., S.193.
53 Vgl. Edmund Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. In: Husserliana. Bd.IV. Hrsg. von Marlz Biemel. Haag, Martinus Nijhoff, 1952. S.220.
54 Vgl. ebd., S.229.

55 Vgl. ebd., S.215.
56 Vgl. ebd., S.336f.
57 Ebd., S.279.
58 Ebd., S.276. 強調は原文による。
59 Ebd., 強調は原文による。
60 Prosa und Stücke, S.187.
61 Ebd., S.188.
62 Vgl. ebd., S.1450ff.
63 Schmitz-Emans, S.79.
64 MoE, S.251.
65 Ideen I, S.319. 強調は原文による。